

司式:高橋真軌
奏楽:山田絵里

前奏:「詩編23」(J.P.スウェーリンク)

招詞:主は多くの民の争いを裁き、はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げずもはや戦うことを学ばない。(ミカ4:3)

讃美歌:こどもさんびか12(『21』35「聖なる聖なる」)

交読詩編23:1-4

01 【賛歌。ダビデの詩。】主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。

02 主はわたしを青草の原に休ませ/憩いの水のほとりに伴い

03 魂を生き返らせてください。主は御名にふさわしく/わたしを正しい道に導かれる。

04 死の陰の谷を行くときも/わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてください。
あなたの鞭、あなたの杖/それがわたしを力づける。

朗読聖書:マルコによる福音書1:35-39

◆巡回して宣教する

35 朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。

36 シモンとその仲間はイエスの後を追い、

37 見つけると、「みんなが寝ています」と言った。

38 イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」

39 そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。

祈祷

全ての命の与え主なる神さま。聖名を崇め賛美致します。どうぞ、御国を来たらせてください。特に、ガザに、ウクライナに、今、戦争や内乱で命の危機にある地域の人々の上に、今日、御国がなりますように。

今朝も、私たち一人ひとりの名を呼んで、会堂で、ライブ配信で、お小さい方々と大人の人と一緒に礼拝を献げることができることを感謝致します。

信濃町教会は、先日、イエスさまの忠実な僕であった西山光生さんを天国にお送り致しました。西山さんの御許での平安を信じ祈り、残されたご遺族の上に、神さまの慰めが注がれますように。

8月が終わろうとしています。この夏も大変に暑い夏でした。暑さのために弱り果てている人がいます。大雨もありました。お家を流されたり、亡くなったり、怪我をしたり、弱り果てている人が居ます。どうか神さまの御手が触れられ、慰めてくださり、明日も生きていけると思えるそのように力づけてくださいますように。

二学期の始まり、お友だちに会えることを楽しみにしている人もいれば、なんとなく学校に行くのに気が重い人もいるでしょう。その人の重荷が軽くなる道を備えてください。

私たちが8月に平和を考えられるのは、80年前にこの国が戦争に負けたからです。私たちは皆、神さまから命を戴いて生きる物とさせられています。神さまから命を与えられた者同士が殺し合うことは、決して神さまの

望まれていることではありませんでした。戦争は負けた者も勝った者も、痛みと悲しみを覚えることを私たちは学んだはずです。二度とこのような悲しみ痛みを、今ここに居る小さな方々が経験することのないよう祈り求めていくことは私たち大人の責任です。神さまの平和の道具として私たちを用いてください。

聖書の一番最初の方に書いてあるように、神さまはお造りになった全ての物をご覧になって、「極めて良かった(創1:31)」と、おっしゃいました。神さまから命を戴いた物は、人間だけでなく、木々も、草も、動物も、海の生き物も、神さまに造られ、命を戴いた物です。環境破壊や酷暑など、気候の温暖化は神さまの造られた「極めて良いもの」を人間が蔑ろにし、壊しているように思えます。調和のとれた神の世界に戻すことができる知恵を私たちにお与えください。

今日は教会学校の西久保幸子さんと佃先生が御言葉を語ってくださいます。お二人の上に、神さまの励ましがありますように。

今日、世界中の教会でもたれる礼拝の上に神さまの豊かなお導きがありますようにお祈り致します。

このお祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:こどもさんびか129(『21』533「どんなときでも」)

子どもへの説教「いっしょに行こう」

西窪幸子

先週まで、皆さんは旧約聖書の『ヨセフ物語』を学んでいました。今日からまた、『マルコによる福音書』に戻ります。マルコによる福音書にどんなお話が書いてあったか覚えていませんか？

最初にバプテスマのヨハネという人が登場しました。イエスさまはバプテスマのヨハネから洗礼を受けました。イエスさまが洗礼を受けると、天から、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者(マコ1:11)」という声が聞こえてきました。その後、イエスさまは「霊」に導かれて荒野に行きました。荒野でサタンの誘惑を受けました。でもイエスさまはサタンに勝ちました。そして、イエスさまはたくさんの人に良い知らせを伝え始められました。皆がずっと待っていた『神の国』が近づいたこと、皆が待っていた神の国がどんどころなのか教え始められました。そして、「神の国が近づいたんだから心をしっかり神さまの方に向けていきなさい」というふうに教えられました。

イエスさまは「神の国は近づいた」と教えるにあたって、一緒に働く弟子を選びました。イエスさまはいつでも一緒に働く人間を必要としてくださいます。最初に選ばれたのはシモンとその兄弟アンデレ、そしてゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネでした。イエスさまは弟子たちと一緒に活動しました。イエスさまはシモンの家族の病氣も治してあげました。悪霊を追い出し病氣の人を癒しました。それでイエスさまに病氣を治してもらいたい、悪霊を追い出してもらいたいと思ってたくさんの人が色々な所からイエスさまの元にやって来ました。今日は、その続きのお話です。

イエスさまは、たぶん弟子のシモンの家に泊まったと思われます。今はまだ、皆が寝ている時間です。外は真っ暗です。でも、イエスさまは一人起き出して家の外に出ました。そして歩いて行かれます。イエスさまはどこに、何をしに行くのでしょうか。イエスさまはどンドン歩いて行かれます。もう人もいないし、家もなくなってしまいました。外はまだ真っ暗で

す。イエスさまは、この静かな場所で一人神さまにお祈りを始められました。

外がほんの少し明るくなってきた頃、シモンさんの家で誰か起き出しましたよ。周りを見ると。“あれ、イエスさまがいません。”その人は、シモンさんに言いました。“シモンさん、シモンさん、イエスさまがいませんよ。”シモンさんは吃驚です。イエスさまはシモンさんに“わたしについてきなさい。”と言いました。だからシモンさんは全てを捨てて、イエスさまに付いて来たのです。イエスさまはシモンさんの家族の病氣も治してくれました。だからシモンさんは“イエスさまに付いて来て良かったな—あ、これからもイエスさまについていくな。”と思ったことでしょう。そのイエスさまが居なくなってしまったんです。さあ、大変です。皆で探しに行くことにしました。

皆もイエスさまを探したことがありますか？“あれ、イエスさま、近くにないよ。どこに行っちゃったのかなあ”と思ったことがありますか。イエスさまはどこに居るのでしょうか。どこを探せばイエスさまに会えるのでしょうか。

私たちは困ったことや悲しいこと辛いことがあると、そのことで頭も心もいっぱいになってしまいます。自分の周りしか見ることができなくなります。でも、そこにはイエスさまは居ないのです。そこではイエスさまに会うことができないのです。

町から離れた所、人や家がない所、まだ暗い時間、そこで神さまに祈るイエスさまに会うことができます。私たちは悲しい時、困った時、苦しい時、神さまに祈るイエスさまの元に行く必要があります。皆は教会で『主の祈り』と一緒に祈りますね。それはイエスさまが教えてくださったとても大切な祈りです。でも今日イエスさまは、また、別の祈り方を教えてください。静かな場所で神さまと二人だけになって、心を神さまに向けて、たった一人でする祈りです。

さて、シモンさんは無事にイエスさまを見つけることができました。イエスさまは、神さまにどんなお祈りをしたのでしょうか。聖書にはお祈りの言葉は書いていません。でも聖書を読むとイエスさまが神さまとどんなお話をしたのか分かります。聖書にはこう書いてあります。

イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出てきたのである。」そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し悪霊を追い出された。

イエスさまは、ここだけじゃなくて、ほかの町や村にも行きました。神さまからそうしなさいと教えられたからです。そこで、神の国について教え、悪霊を追い出しました。神さまとお話して、それが自分の仕事だというふうに分かったからです。

イエスさまが、病氣を治したり、悪霊を追い出したりするのは、神の国では、悲しむ人、弱い人、苦しんでいる人が一番最初に大切にされるということを教えるためでした。神の国では、悪霊はもう力を持っていないのです。神の国では、悲しむ人は慰められ、もう、苦しんではいけません。そのことを教えるために、イエスさまは人々の病氣を癒し、悪霊を追い出しました。それを見た人たちは、驚き、喜び、そして神さまを賛美しました。

イエスさまにとって一番大切なことは、人々が神さまを賛美することでした。そのために、イエスさまはたくさんの人の病氣を治しました。でも、イエスさまは全ての人の病氣を治したわけではありません。時には

病氣を治さないこともありました。“病氣を治すことも、治さないことも、それは神の栄光のためなのだ”とイエスさまは言いました。

今日、イエスさまは私たちに“ほかの町や村にも一緒に行こう”と誘ってくださっています。“そこでわたしは神の国について教え、悪霊を追い出し、病氣を癒す。それを見て人々が驚き、喜び、神を賛美する姿をあなたも一緒に見よう。さあ、わたしと一緒に”と、今日もイエスさまは私たちに招いてくださっています。

お祈りします。天にいらっしゃいます父なる御神さま。御言葉を感謝致します。御言葉の種があなたの力によって芽を出し、大きく育っていくようにしてください。私たちが、あなたと一緒に歩き続けられるように、いつも私たちに励ましてください。今日、ここに來ることができなかったお友だちの上に、あなたの恵みが豊かにありますように。この祈りを、主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げ致します。アーメン。

讚美歌:497「この世のつとめ」

説教「祈って、進む」

佃 雅之

今日の箇所には、イエスさまが朝早く起きて祈っておられたことが記されています。新しい一日を祈りから始めることは、弟子たちの、そして私たちの日々の歩みの模範であります。イエスさまのお働きは、いつも祈りと共にありました。祈らずに動けば、いつの間にか神さまが示して下さる歩むべき道を見失ってしまうからです。祈って、父なる神と近しく交わることで、導きが与えられます。

この時のイエスさまは、宣教活動を開始されたばかりの時期で、試練と葛藤の中に置かれています。今日の箇所の少し前には、大勢の病人や悪霊に執り憑かれた人たちを癒しておられた様子が書かれています。この町にはイエスさまの助けと救いを必要としている人たちが大勢います。イエスさまのお働きは、肉体的にも精神的にも、そして霊的にも、深い労苦を伴われていたことでしょう。だからこそ、イエスさまは一日の始まりを父なる神への祈りから始められたのです。

ここに私たちの信仰生活にとって大切な優先順位が見えてきます。私たちは、時間があれば祈る、落ち着いてから祈ると考えがちですが、イエスさまは、もっとも忙しく人に必要とされ疲れきっている、その時こそ祈ることを第一とされました。

このときの祈りの中心は、このままカファルナウムに留まるべきか、それともほかの町や村へ行くべきか、ということであったと思われます。イエスさまは、神が与えてくださった務めに心を向けるために祈られたのです。

祈りとは、父なる神と心を合わせ、歩むべき道を確認する時です。十分に祈る時間をとることができなければ、人の期待や自分の感情に流されてしまいます。イエスさまは祈りによってご自分を守られました。何よりも多くの人たちを癒されたイエスさまご自身が祈りによって癒される必要があったのです。祈りは外から見ると静かな行為のように見えます。けれども実際には、私たちの心が最も生き生きと働いている時なのです。イエスさまの祈りは自分のことだけではなかったでしょう。弟子たちのため、町の人のために祈っておられたのです。

すると、そこにイエスさまの祈りを妨げるように弟子のシモンとその仲間たちが現れます。おそらく彼らはイエスさまが朝早く、まだ暗いうちか

ら祈っておられるとは思ってもよらなかったのでしょうか。イエスさまを探していた弟子たちはどのような気持ちであったのでしょうか。弟子たちからの目から見れば、カファルナウムにおける宣教は大成功と思えたはずで、シモンの家には、この日も朝早くから多くの人が集まりました。この町の人たちは、“イエスさまを独占したい、今日ばかりでなくずっとこの町に留まって病を癒し、悪霊を追い出し続けて欲しい”と願っていたのだと思います。

シモンをはじめとする弟子たちは集まってくる大勢の人を見て、“この伝道のチャンスを逃してはいけない”と考えたはずで、もっと率直に言えば、“イエスさまの言葉を信じて従ったことは間違っていない”と心から確信したのです。弟子たちは“自分たちは正しい道を選んだのだ”と思い、イエスさまの弟子であることを誇らしく感じたに違いありません。そして、“この方に従って行けば未来はきっと明るい”と希望を抱いたのだと思われます。

ところが、朝起きるとイエスさまの姿がない。“いったいイエスさまはこんな大切な時に何をしているのか。あなたに癒されたい人がまだまだたくさんいるのですから早く戻って来て奇蹟の業を行って欲しい。”そのような思いでイエスさまを探していたのではないのでしょうか。

弟子たちは自分たちの思いが先走ってしまい、祈りに集中しておられたイエスさまへの配慮はありませんでした。シモンをはじめとする弟子たちは、イエスさまの癒しの奇蹟に沸き立つ大勢の人々の声に心を奪われてしまったのです。イエスさまを最も近くで見ていたはずの弟子たちが、実はイエスさまの想いを一番理解できていなかったのであります。

シモンは“町の人の声に応えることこそ自分の役割だ”と考えたのでしょうか。“もっと多くの人に期待されたい、感謝されたい”、そう思う気持ちが彼の心を支配していたのです。弟子たちはそれを“伝道だ”と信じていました。しかし、その思いは人間的なものであって神の御心とは異なるものでした。

イエスさまは弟子たちにこう言われます。

「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」

この言葉はシモンにとって意外なものでした。“すでに集まってきている人たちはどうするのか、せつかく評判が広がっているのに”、弟子たちは驚いたと思います。私たちが、しばしば、周囲の人の期待や評価に縛られてしまうことがあります。家庭で、職場で、教会で、“こうして欲しい、こうあるべきだ”という声に振り回されることがあります。人に仕えることは大切です。しかし、最も大切なのは、神の御心に従うことです。

イエスさまは祈りを通して御心を確信し、弟子たちと一緒にカファルナウムを離れる決断をされました。祈りによって、自分の進むべき道をはっきりと見出されたからです。

“ほかの町や村へ行き、そこでもわたしは宣教する”とイエスさまは言われます。「宣教する」は、“御言葉を以て伝道する、説教をする”という意味の言葉です。イエスさまは癒しの業を行うだけでなく、御言葉を宣べ伝えるために、この世に遣わされた方です。一人ひとりが祈り、主が与えてくださった場所に遣われ、与えられた期間その場に留まり、説教によって福音を宣べ伝える。このことは、イエスさまの時代から2000年経った今も夫々の牧師たちに与えられている務めです。

病の癒しは霊的な奇蹟的な体験です。しかし、私たち信仰者の最大の霊的体験は“御言葉を聞き、その言葉に従う”ことであります。

カファルナウムの人たちは、癒しの業という奇蹟に感謝しました。けれども、“彼らの喜びはイエスさまの語る言葉よりも、奇蹟による癒しであった”と言えます。

神の国に入ることができるのは、悔い改めによってです。つまり、信仰によってのみ、私たちは神の国へと導かれるのです。決して奇蹟を経験したからといって自動的に神の国に入れるわけではありません。人は奇蹟に心を奪われると、却って御言葉に耳を傾けなくなるものです。奇蹟そのものに熱狂してしまい、大切な神の声を聴き逃してしまうのです。だからこそ、イエスさまは常に、御言葉による伝道を第一とされました。

私たちの教会活動はどうでしょうか。人を喜ばせること、人の期待に応えることばかり考えてはいないでしょうか。人から感謝されることばかりに心を奪われてはいないでしょうか。本当に神に献げるに相応しい神に喜んでいただく礼拝、教会活動になっているのでしょうか。もし、そこに御言葉そのものであるイエスさまがおられなければ、それはただの集まりにすぎません。キリスト不在の教会、それはむしろ宣教の妨げとなってしまいます。

父なる神のご計画は、神の国の福音をより広い地域に伝えることでした。祈らずに弟子たちの声や町の人々の期待に応えていたら、その場に留まってもっと多くの人々を癒すこともできたでしょう。しかし、それは本来の使命から逸れてしまうのです。

私たちが日常の中で色々な声を聞きます。家族や教会の人たちからの要望、職場での期待、世間の常識、どれも大切ないように見えますが、全てに応えようとすると、気づかない内に本当にするべき事を見失ってしまうでしょう。このことは、教会の働きや奉仕でも同じ危険があります。人の役に立つことや喜んでもらえることが目的になってしまっていて、神のご計画を聞くことを忘れてしまうのです。だからこそ祈りが必要です。

祈りの目的の一つは、方向の確認をすることにあります。神の前で自分の計画や感情を一旦脇に置いて、“主よ、あなたは私に何を望んでおられますか”と尋ねることです。イエスさまがそうされたように、私たちが祈りによって自分の務めが何であるかを知らなければなりません。

38節でイエスさまは弟子たちに向かって「近くのほかの町や村へ行こう。」と言われました。この言葉は、“さあ、一緒に行こう”、という呼びかけの声です。イエスさまは、ご自身の使命である宣教の御業に私たちが同伴者として選び出してくださっているのです。現状に満足してしまったり、あるいは、自分だけ救われればいいと考えて、宣教を怠ることは、与えられた使命を放棄することになります。

クリスチャンの使命とは何でしょうか。それはイエス・キリストを証しすることです。日々の生活の中で、私たちが言葉と行いを通して福音の香りを放つことです。家庭で子供に祈る姿を示すこと、職場で誠実に働くこと、隣人を愛し仕えること、これら全てが福音の証となります。この使命に生きるためには方向性を見失わないことが必要です。

私の思いや願いではなく、神が私に望んでおられることを正しく受け止めなければなりません。そのために週の初めの礼拝を欠かすことはできません。神を第一とし、日曜日の朝、御言葉を戴き、共に祈り、新しい力を受け取ることは私たちにとって一週間の出発点です。

神は私たちを通して、家庭に、職場に、地域に光を届けたいと願ってお

られます。この週も、御言葉を宣べ伝えるために、祈りつつ、キリストを証しする者として進み行きたいと思います。

お祈りを致します。

天の父なる神さま。あなたがこの朝、御子イエス・キリストの祈る姿を通して、私たちに信仰生活の原点を示してくださいました恵みを覚えます。あなたは、遠く離れたところにいる方ではなく、いつも私たちの傍に居てください、私たちを愛し、守り、導いてくださる方です。

主よ、どうぞ、私たちも祈りによって生きておられるあなたと向き合い、あなたと共に歩む者としてください。私たちが人間の声に惑わされることなく、あなたの御心を第一として、与えられています使命を果たして行くことが出来ますように、聖霊の力によって私たちの弱さを支え、これからの歩みを導いてください。

主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌:こどもさんびか 58(『21』 60「どんなにちいさいことりでも」)

献金

感謝の讚美歌:65-2「今ささげる」

感謝の祈り:神さま、今日は礼拝に招いてくださってありがとうございます。みことばを感謝いたします。この一週間をイエスさまと共に歩ませてください。このお祈りをイエスさまのお名前をとおしておさげいたします。アーメン。 『主の祈り』…。

派遣:こどもさんびか 32(『21』 46「聖なる聖なる」)「すべての人よ」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告:週報記載の通り。

後奏:「わが魂よ、主をほめまつれ」(D. ブクステフーデ)